

同行が手を挙げてこう言われました。「仏法は毛孔から入るとは、聞いてるうちに何かが入ってくることはない」とワシは受けとめております。すでに毛孔から入っているから、聞く気のない私が、今日、ここに、おるんです。だから、この私を法座に運んでいる力は何なのか。ワシはそれを聞きに来とるんですと。

「毛孔から入った」と言おうが「まだ入ってない」と言おうが、自分で自分を覗く限り、所詮は私の分別です。が長田さんの仰せは全く違いました。「信心毛孔」という耳慣れた言葉一つでも、立脚地によって、意味がまったく変わると鮮烈に教えられた出来事でした。

「我」が破られる

この度刊行した林暁宇先生の書簡集に「どうにもならんというものが人間には大事なのです。それだけが「我」を破っていくのです」という言葉が載っています。「どうにもならんもの」が大事”なんて、人間の物差しに立てばやせ我慢としか聞こえませんが、ですからこれは林先生の前に聞こえた言葉であり、ご自

身もきつとこの一言に育てられたのです。「我」が破られるとは、私たちのものの見方、モノサシが翻される一瞬でしょう。

「一五〇歳」

一月三日付日経新聞の一面にこんな記事が載っていました。

「衰えない肉体」、「老いの抑制、臓器の交換、そして脳と機械の融合が進めば、二〇五〇年には不老不死に近づく」。記事には、「若手研究者約三百人に人間の寿命は何歳まで延びるか」と尋ねたところ、一五〇歳が最も多かった」とありました。不老長寿は人間の見果てぬ夢。ですから夢の実現なのに「一五〇歳」と聞くと苦笑される方が多いのです。記事には、一五〇歳時代が到来したら、「最多の死因は自殺」になるだろうと書かれていました。

問われる生

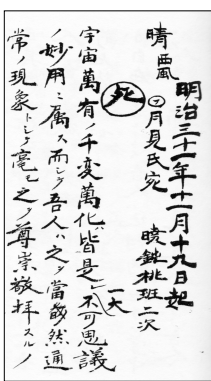
夢が実現しても喜べない。仏法が教える迷いの境界、六道には「天」を含みます。理想実現の「天」を「地獄」と同じ流転と見る眼が仏法でしょう。天は人間の理想郷。浄土は本願の国土。全く異質なんです。思い通りにならないから苦し

いのはわかります。が思い通りになっても空しいというのが現代の課題ではないでしょうか。会社員時代の上司と飲んだ時、「百々海君、きょういく問題って知ってる？」と訊かれました。リタイアして羽を伸ばせるはずが、「きょう（今日）いく（行く）」所がない。自分を持って余す、退屈に直面する。思い通りになっても私に満足無し。ではどうなりたいのか。何故か。この問いこそ仏さまの智慧に訊きたいことです。

「暁鈍桃班二次」

清沢満之先生は明治三十六年六月六日にご西帰されますが、その五年ほど前、明治三十一年八月十五日から『臘扇記』という日記を記されています。結核は進行、宗門改革は頓挫、寺内では歓迎されない厳しい境遇にあり、「役に立たない存在」を意味する「臘扇（十二月真冬の扇子）」というご自身の号を日記名とされたのです。後にこの『臘扇記』を基に多田鼎師が成文されたのが「絶対他力の大道」です。ですが日記ですから天候、手紙の受発信記録や体調も記されています。

二冊目の冒頭、十一月十九日の欄には「晴。西風。フ（封書）月見氏宛。暁鈍桃班二次」と記されています。「暁鈍桃班二次」というのは、夜明け前に（暁）鈍いピンク色の血を（鈍桃班）2回（二次）吐いた、という病状の記録です。



暁鳥先生ご門下の岩瀬暁燈

先生が、愛知県碧南に暮らす同行から請われて、同行宅の玄關の屏風に揮毫されたのがこの「暁鈍桃班二次」の一句でした。単なる病状のメモに過ぎませんが岩瀬先生にとつての仏法は実にこの一句だった。身は思いを超えて運ばれている。自力無功という存在（身）の厳粛な事実をこの一句に聞きあてられたのでしよう。ある時、そのお宅に熊本の西村見暁先生をお招きされた折、先生はその一句を見るなり、玄關に土下座して号泣されたと聞きました。聞法の何たるかを知らされます。

一句に出遇う

私たちは親鸞聖人にどこで出遇うのか。例えば『正信偈』のこの一句だ、私にとつては『御文』のこの一言だ、この仰せだ、と。漫然とではなく、「ただいまの私においては、この一句に尽きる」と言い得る言葉との出遇い。真理、分別以前の世界からの呼び声として聞こえる。聞法とは、最も具体的には一言との出遇いであり、聞こえる時の到来ではないでしょうか。

聞き書き担当者・感想

今回、逸話や先生ご自身が聞法会で習得された体験談を交えた法話で、親しみが持てました。聞き書きを担当し、よく聴聞できたからこそですが…。

これからも聞法会にご縁をいただき、「私にとつてのこの一言、この一句」なるものを頂けますことを願っております。
(渡辺久仁子)

第17回（7月13日）

「生活の中で出遇う親鸞さまの教え」
牧野桂一先生

（大分子ども発達支援研究所長）